

福祉のひろば

特集

だれもが虐待をする可能性のある現代社会

——子どもの権利条約発効20年の節目にあたって——

12
2014



ひろばトーク

まつもと

コント・パフォーマー

松元

ヒロさん

.....
自分が信じる道を——笑いで社会をあかるく変えたい——

編集 総合社会福祉研究所

住む人・使う人が主人公！

私たちは住む人・使う人の
立場に立って設計しています。
お気軽にご相談下さい。

京都建築事務所

〒 604-8083

京都市中京区三条柳馬場東入中之町10

代表取締役社長 川下 晃正

TEL (075) 211-7277

FAX (075) 211-7270

<http://www.kyoto-archi.co.jp/>

福祉のひろば 読者のつどい

日時：2015年2月1日(日) 14時～16時

会場：おかげさんホール

大阪市城東区古市 1-20-17 (大阪福祉事業財団城東老人ホーム内)

第1部 人形劇団による公演
(神門やす子さんも出演)

第2部 福祉のひろばを通じての交流

会場へのアクセス
については、下記
までお問い合わせ
ください

(有)福祉のひろば

〒543-0055 大阪市天王寺区悲田院町8-12 TEL・FAX06-6779-4955

E-mail: hiroba@sosyaken.jp HP: <http://www.sosyaken.jp/hiroba/>

秋田 阿仁マタギ、男鹿真山ナマハゲ 《生活と伝承》

九月なかば、秋田県男鹿真山と北秋田阿仁打当に伝承と生活を訪ねた。自然と生活に根を張っていた伝承も薄れてきている。旅マタギの発祥の地、阿仁地域。その阿仁打当でマタギ九代目、鈴木英雄さんに会えた。この打当の集落で山に入るのは二人になった。根子も二人、そして比立内と三つの集落にマタギがいる。共同して山に入ることもある。秋山郷から阿仁への道を辿ってみた。（写真は、ウサギ猟に使うクラダという道具を投げるとその音は鷹が飛ぶ音に似る。その音で雪穴に隠れるウサギを捕える）



一九七五年以降の銃規制強化で、山に入れるマタギが激減。マタギは、古い伝統と独特の信仰を継承してきた狩人の集団。集落が違えば、信仰も伝統も違う。しかし、山に生きることは、山で生きる生物や気候、山の移り変わりを知らないところで生きる動物を射止めることはできない。狩りでとらえた獲物は、神からの授かりもの。猟に参加したすべてが、平等に分け合うマタギ勘定。それが、マタギを続けられた秘訣だろうか。



鈴木さんは、無形文化財に指定されたマタギの道具を手に、その意味を語る。伝承を支えてきたのは、小さいときから山で生き、暮らし、先代から山で生きることを体験を通して学んできた、その機会があった。長年続いてきたマタギの伝承はきびしい。



大晦日の晩に男鹿半島のほぼ全域で行われるナマハゲ。炉端^{ろばた}にかじりついていると手足にできる火型（低温やけど）のことをナモミという。このナモミを剥ぐという言葉がなまったのがナマハゲの語源と伝えられる。

「お晩です。ナマハゲ来たす」と案内の先立^{さきだち}が訊ねる。そしてナマハゲは、「ウォー」と玄関で七回シコを踏む。「泣ぐ子はいねが。怠けものはいねが。言うごと聞がね子どらいねが。親の面倒みない悪い嫁はいねが。ウォー」と家中を探し回る。ナマハゲは、独身男性が担う。それぞれの集落に生きる伝承は、次代に生きる子どもへの賛歌。そのときは、恐れ慄^{おのの}いたものの、大人になり、その存在を受け継ぐ。きびしい自然の中で、その地で生きる人々と信仰をあわせて垣間見る。



男鹿半島には、集落ごとにナマハゲが生きる。そして、ナマハゲの面もそれぞれの集落で異なる。冬のきびしいなかでも、火に当たってばかりいないで、励めよとの言い伝えもある。真山では、こどものようすが書かれている「なまはげ台帳」を見て、こどもに改めるかとナマハゲが迫る。ナマハゲは鬼ではない。山の神だ。打当も男鹿も山の神を大事にする。しかし、どちらも医療過疎。熊の胆も一軒一軒入るナマハゲも伝承している。(写真、コメント：下野祇園)

【ひろばトーク】

自分が信じる道を——笑いで社会をあかるく変えたい 松元 ヒロ 6

●特集● だれもが虐待をする可能性のある現代社会
——子どもの権利条約発効20年の節目にあたって

【座談会】児童虐待の加害を減らすために

——児童虐待の最近の動向、その背景から考える

瀬川佳成、杉山春、松本伊智朗、黒田孝彦 10

●サブ特集●島根県浜田市

P F I 方式島根あさひ社会復帰促進センターをたずねて

浜岡政好、西村憲次 24

●トピックス●

野宿者サポートのいまを考える 中島 素美 34

ポーランドの障害児教育・福祉調査

——アウシュヴィッツと障害者スポーツ 黒田 学、小西 豊 40

元海軍兵・瀧本邦慶さん 戦争体験をかたり、現代に警鐘をならす 46

第28回高齢者大会in富山「今風井戸端会議」に参加して

西村 憲次 50

ゆたかな社会福祉実践を、ともに。——職員募集広告 52

●連載●

フォーラム 「自己責任」で切り捨てていいのか 相野谷安孝 56

あれから3年……釜石・東日本大震災を記録する会代表

九、震災と戦災の惨禍・教訓を後世に引き継ぐ活動 前川 慧一 58

相談室の窓から M子ちゃんらしく、無理なく成長を 青木 道忠 60

わらじ医者 早川一光の「よろず診療所日誌」 早川 一光 62

育つ風景 子どもと暮らす、子どもをわかる 清水 玲子 64

いっぽいっぽの挑戦 (21) 繁澤 多美 66

映画案内 『WOOD JOB ～神去なあな日常～』 吉村 英夫 68

現代の貧困を訪ねて 生田 武志 70

反貧困フェスタやねん！ 2014——こどもの貧困って？

なにわ銭湯見聞録(廿) ハダカのつきあいですから ラッキー植松 72

いただきます！

定番メニューにひと工夫！野菜ごろごろカレー あさひ希望の里 74

ホームレスから日本を見れば ありむら潜 76

花咲け！男やもめ 川口モトコ 77

福祉のひろば

2014年12月号

●表紙の絵●
神門やす子



●カット●
川本 浩

みんなのポスト 54 / 福祉の動き 78 / 今月の本棚 81

●グラビア● 秋田 阿仁マタギ、男鹿真山ナマハゲ (生活と伝承)

自分が信じる道を

——笑いで社会をあかるく変えたい——

コント・パフォーマー 松元ヒロさん

私が尊敬し目標にしているのは、芸人のマルセ太郎さんと落語家の立川談志さん^{たてかわだんし}です。マルセさんは、「スクリーンのない映画館」という芸で有名でした。在日コリアンで、何百人もいるお客さんの前で、一言目に「日の丸は腐ってる！」って言うんです。びっくりして、みんな引いちゃうでしょ。そんなこと関係なしに、マルセさんは自分が思っていることを心の底から話すんです。そして、最初は引いていたお客さんたちも、だんだん吸い込まれていく。私は、そんなマルセさんの芸をみて、こんな芸人になりたい！と思い、ピン芸人として独立しました。腹の底から笑ってもらうためには、自分が思ったことを、心の底から言わないといけないと気づいたんです。そうすると、聞いている人も殻をやぶってくれます。談志さんは、あるとき「もともと芸人というのは、みんなが言えないようなことを代弁するのが芸人なんだ。だから、お前のやっていることは間違っていない」って言うってくれたんです。すごうれしかったですね。

人って、多い方についていっちゃうでしょ。とくに日本人は「空気」に弱いじゃないですか。「そんな空気だったから」ってみんな同じ方向を向いちゃう。でも、本当に正しいことは人数じゃない。多いから正しいんじゃないですよね。「記憶は弱者にあり」。少数派でも、踏まれた人の気持ちになって考えないと、ものごとは進まないと思います。

私は弱くて、つついっ人の顔色をうかがったり、人に合わせようとしてしまう。こんなネタをしています。心が折れそうになることもあります。最近も、自民党の人たちの前で麻生元総理のモノマネをしたら、怒って帰ってしまった人がいました。自分の芸で相手の殻をやぶれなかったことが、くやしくて、あとで泣いてしまいました。その話



まつもと ひろ

1952年、鹿児島県生まれ。法政大学在学中よりパントマイムをはじめ。コミックバンド「笑パーティー」、コント集団「ザ・ニュースペーパー」を経て、1998年に独立、ソロ活動へ。自身が憲法になりきり憲法の良さを伝える「憲法くん」や、歴代総理大臣のものまね、リストラ問題など、笑いと涙の風刺が好評。ライブ予定はこちらから→<http://www.winterdesign.net/hiropon/index.html>

を妻にしたら、「なんであなたが泣く必要があるの！ その人たちは私たちの税金で食べてるんだから、庶民の話を最後まで聞きなさい、くらい言わないと！」と怒られました（笑）。私のネタをみて、怒って帰ってしまう人もいます。でも、「ありがとう！ 勇気をもらった！」「よく言ってくれた！」と言ってくれる人もいます。万人受けしなくていい、その人のためにがんばろうって思っています。

天皇家民営化計画というネタをしますが、もしいまここに天皇がきたら、パツと立ち上がりますよ。直立不動で（笑）。でも、思わず立ってしまう教育が自分に浸透していることがイヤですよ。私はそんな自分を、本を読んだり、いろんな人に出会って勉強することで変えていきたい、成長していきたいと、この歳になっても思っています。

人間っておもしろくて、自分の弱い面や反省すべき面を隠さずに言ってしまうと、相手も共感してくれて、「そうだよ。そんなこともあるよね」って歩み寄りのスパイラルになるんです。そこで大事なのが「笑い」です。嫌いな人がジョークを言っても笑わないですよ。その人を許してないと笑わない。笑いには、人にやさしくなったり、好きになったりする効用があるんです。だから、笑いはすごく大事だし、笑いでいろんなものをあかるく変えていける、そんな気がしています。

世間一般で言ったら少数派かもしれないけれど、自分が思うことを信じ続けることが大事だと思っています。他人がどうかではなく、自分が信じられる価値観をみつける。そのために、勉強したり、いろんな人に出会ったり、たくさん学ぶことが大切です。そうすることで、自分が本当に大切にしたいものが、みえてくると 생각합니다。



だれもが虐待をする可能性のある現代社会

——子どもの権利条約発効二〇年の節目にあたって——

今特集は、松本伊智朗さん（北海道大学大学院教授）と杉山春さん（ライター）、瀬川佳成さん（高鷺学園園長）の三人が登場した児童養護施設高鷺学園でのセッションを掲載します。

一〇月半ば、テレビ番組で、児童相談所はいるかいらないかを専門家でないコメンテーターが回答する企画がありました。児童虐待の対応は警察がすべき、そもそもシステムとして対応できていないなど。前段に、児童相談所の体制がきびしいことは紹介されても、向き合っている相談所の職員や被虐待当事者の声は軽視されている。視聴者は虐待死亡事例の結果だけを突きつけられ、歴史や経過、ましてや児童虐待の背景など冷静な発信は薄い。児童虐待問題のさまざまな実践や研究調査の国内外の積み上げ・提起が横に置かれ、現象面のみに目を向ける姿勢は、政権の自己責任や自助・共助の道ではないだろうか。

戦時体制に染まる中で、夫を取られ、生活が困窮する母子家庭が増えるなか、母子心中が急激に増加する。それで良いのかの声に動かされて、一九三三年に制定された児童虐待防止法。二〇〇〇年の児童虐待の防止に関する法律制定、四年後の見直しに当たり、二〇〇四年七月号で、「子どもと親を虐待から守る」を特集し、改訂にのぞみました。『福祉のひろば』では、子どもの貧困問題をさまざまな形で取り扱ってきました。二〇一三年五月号では、「続・容認できない子ども時代の不平等、不公正の実態解消のために」を特集し、国連子どもの権利委員会（CRC）